

いたことが証明された。

この遺跡から南へ約一・五キロの本庄池南端部までの低丘陵上からはこれまでも住居跡・貯蔵穴・箱式石棺などが数多く確認されており、地理的な諸条件から考えても弥生時代の全時期を通じて犀川町域の中でも中心的な大集落が存在し、それに伴う墓地の営まれたことを窺わせている。また現在の本庄池に当たる部分は、池の築堤がなされる前までは池底のかなりの部分に水田があったと聞いているので、弥生時代においても低湿地が広がっていたはずであり、このあたりがまた稲作地として最適の場所となっていたことも確実であろう。

下高屋から桜台を通過して大熊への道路建設中に幾つかの箱式石棺が出土しているが、そのうちの一基からはほぼ完全な熟年女性の人骨が出土しており、弥生中期のものと推定されているが、この時期この付近一帯に形成されていた農業共同体内で司祭的な性格も持ち合わせていた女性小首長であろうか。(写真9参照)

犀川小学校校庭遺跡とほぼ同じころの遺跡として、最近発掘調査が行われた末江遺跡がある。末江川最上流部の低台地上にあり、住居跡七軒と貯蔵穴などが出土している。住居跡からは石剣や石戈が出土している。

次に祓川に面した遺跡群を見ると、木井馬場地区のタカデ遺跡や寺門遺跡がある。それぞれすぐ近くに祓川を見下ろす河岸段丘上に営まれた集落を中心とした遺跡である。そのうちタカデ遺跡は堅穴住居五軒と箱式石棺墓・甕棺墓・土壙墓からなる遺跡で、時期的には弥生前期から終末期にわたっている。特に前期中ごろから後半と考えられている住居跡出土の甕には籾の圧痕が残っており、さらに稲穂を摘み取る石包丁の出

土していることは、このころ既にこのような内陸部の河川流域の小平野でも稲作の行われていたことを示している。またA区1号箱式石棺からは後期後半から終末期と考えられる副葬品の小型仿製鏡が出土している。これとほぼ同じころの小型仿製鏡が山鹿の石蓋土壙墓や続命院の箱式石棺から出土しており、このころこれらの地域での小首長の萌芽を思わせる。タカデ遺跡から約一・三キロ上流の寺門遺跡では住居跡二軒と土壙墓が出土している。弥生中期の遺跡で、大陸系の石器である抉入片刃石斧が出土している。

ここから南の横瀬・伊良原・帆柱地区からはこの時代の遺跡・遺物はまだ発見されていないが、自然的な諸条件から見るとこの時代この地域での人々の生活が全く無かつたとは考えられず、将来調査の機会があれば発見されていくことは確実であろう。

五 調査された犀川町の弥生時代遺跡

(一) 犀川小学校校庭遺跡(本庄)

高屋川と喜多良川に挟まれて南北に長く延びる丘陵は、本庄付近で崖となつて平野と交わるが、その先端部(犀川小学校運動場北端)に、本遺跡は位置する。古くこのあたりは雨後すぐに円形に乾燥する場所があるといわれてきた。昭和二十四年(一九四九)二月、田頭喬氏(なかがし たかし)(小倉高校教諭)がここを試掘調査して、弥生時代の住居跡があることを確認した。同年四月になつて県の援助のもとに、九州考古学会・県歴史調査委員会の合同調査班により本格的な発掘調査が行われた。報告書は出されていないが、以下二・三の刊行物で掲載された本遺跡の特徴を見ることにす

る。(写真6参照)

▽森貞次郎「九州」日本の考古学Ⅲ 一九六六

弥生前期後半の土器について述べている中で「このころ西瀬戸内沿岸では、これまでの北部九州を中心とした土器形式から離脱して、近畿・東瀬戸を含む一つの文化圏の中に包含され、遠賀川流域はその西側に位置するようになる。この文化圏は壺形土器のもつ木葉状文によって象徴される。福岡県犀川小学校校庭遺跡はその代表的なものであり、小田富士雄氏によれば隅丸方形の竪穴住居二つにはおのおの三個の円形袋状貯

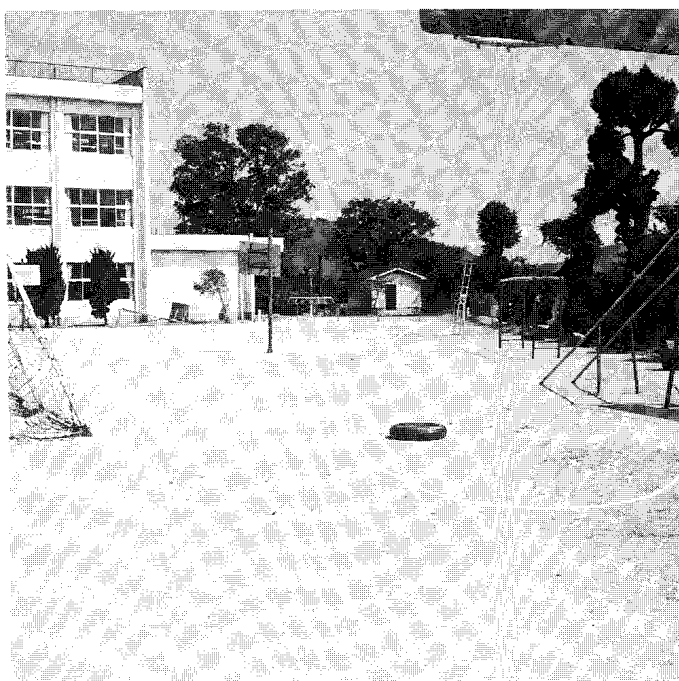


写真6 犀川小学校校庭遺跡

蔵穴が配せられていた」とある。

▽原口信行「考古学から見た京都地方」美夜古文化 第三号 一九五一
犀川小学校庭では此の貯蔵穴が二〇個以上発見された。麦作は同じ校庭西隅炉跡底から発見された一粒の炭化小麦がその存在を肯定させる。

▽定村責二「美夜古平野の古代文化」美夜古文化 第二〇号 一九七一
犀川小学校校庭の住居跡は隅丸方形の竪穴住居であり、弥生前期後半の遺跡として注目された。円形袋状貯蔵穴三個も、竪穴住居二軒に配されており、また炭化小麦がここで発見され、前期後半には米・麦・粟などの栽培の事実を知ることができた。

▽山中英彦「猪熊古墳群」猪熊古墳群発掘調査団 荏田町土地開発公社 一九七六

板付Ⅱ式から須玖Ⅱ式(※弥生前期後半〜中期後半)に及ぶ集落跡としては、今川の上流、犀川町本庄にある犀川小学校校庭遺跡がある。この遺跡から榎原式に酷似した文様を有する土器片が五号竪穴から発見されている。現物は遺憾ながら行方不明になっているが、木葉文を浮彫りする磨研土器である。現在小倉高校に保管中の本遺跡の土器類を分析した所見によれば、五号竪穴の出土遺物は全て板付Ⅱ式に比定されるもので、本遺跡出土の土器類中には板付Ⅰ式を一片も含まないことから、板付Ⅱ式に共伴する遺物とみることができよう。この共伴関係は板付Ⅱ式と榎原式の年代的平行を示すものとはもちろん考えられぬ。

▽犀川小学校校庭発掘調査当時の新聞記事

弥生式住居跡

本格的調査を開始

京都府犀川町小学校校庭の弥生式立穴住居跡はさる二月十六日小倉高校田頭教官の試掘以来新しい弥生式住居形式として注目されていたが県も積極

的に援助、五日には九州考古学会、県歴史調査委員会の合同調査班一行十二名が現地へのりこみ本格的発掘を開始、六日までに住居跡六カ所を掘った結果、石斧・ほうちょうのみ・やじりなど多数が発見され当時の母屋、納屋、仕事場などの家屋形態や古代村落のあり方がはっきりした。

昭和24・4・7 毎日新聞

(二) 末江遺跡(末江)

本遺跡は今川の支流である末江川流域の狭長な谷底平野の最奥部に位置する。平成四年(一九九二)度に圃場整備に伴う発掘調査で発見され、

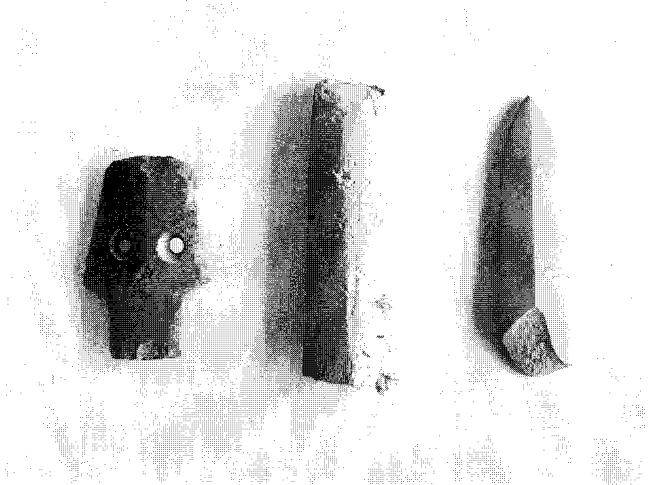


写真7 末江遺跡出土石器
(左)石文 (中)石剣未製品 (右)石剣

住居跡七軒(円形住居三、方形住居四)、貯蔵穴二〇、土壙、ピット群が確認され、大量の土器と土製品(ミニチュア土器)、石器(石斧、石剣、石戈、石鏃、砥石、磨石)、投弾、曲玉などが出土している。弥生時代前期から中期にかけての遺跡である。(写真7参照)

(三) 寺門遺跡(木井馬場)

本遺跡は、祓川中流域の左岸、木井馬場地区の南端部に位置する。平成四年に圃場整備事業に伴う発掘調査で発見され、住居跡二軒、土壙三カ所が確認され、少量の土器片と抉入片刃石斧が出土している。弥生時代中期の遺跡である。(写真3参照)

(四) タカデ遺跡(木井馬場)

本遺跡は犀川町木井馬場北辺の祓川右岸に位置する。遺跡発見の発端は木井地区の圃場整備事業に先立つ平成元年度からの同地区の発掘調査によるものであった。祓川はこの遺跡から見ると西側約一〇〇メートルを流れているが、この川の旧流路によって堆積形成された砂礫層・粘土層中に遺跡群が見られた。

発見された遺跡群は竪穴住居五軒、土壙九基、甕棺墓一墓、箱式石棺墓六基、土壙墓一基が確認されており、遺物からみると時期的には弥生時代前期から終末期にわたっている。祓川の旧河道に当たる河岸段丘面上においての住居跡と墓地群であることがわかった。

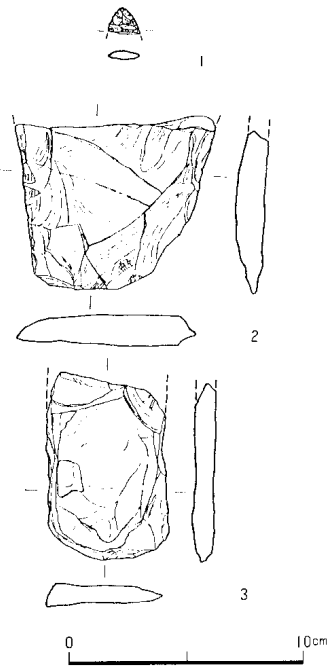
調査は削平される部分をA・B・Cの三区にわけて合計四〇〇〇坪について行われた。以下報告書によると

弥生時代前期の遺構としては、A区では十三号住居跡、二・四号土壙



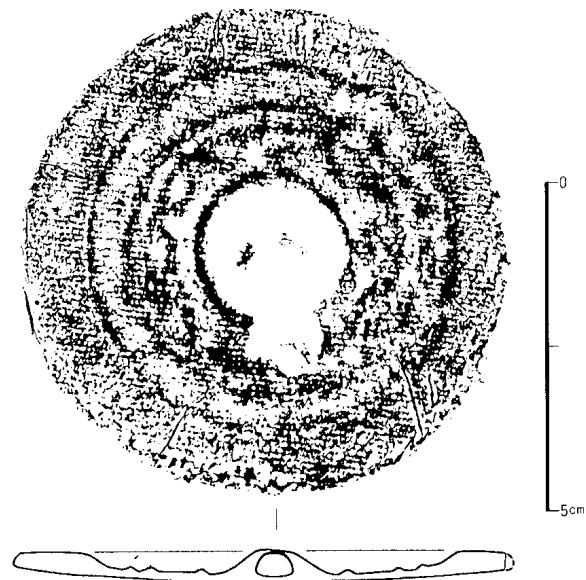
写真8 タカデ遺跡箱式石棺群出土状況

第33図 タカデ遺跡30号住居
出土石器



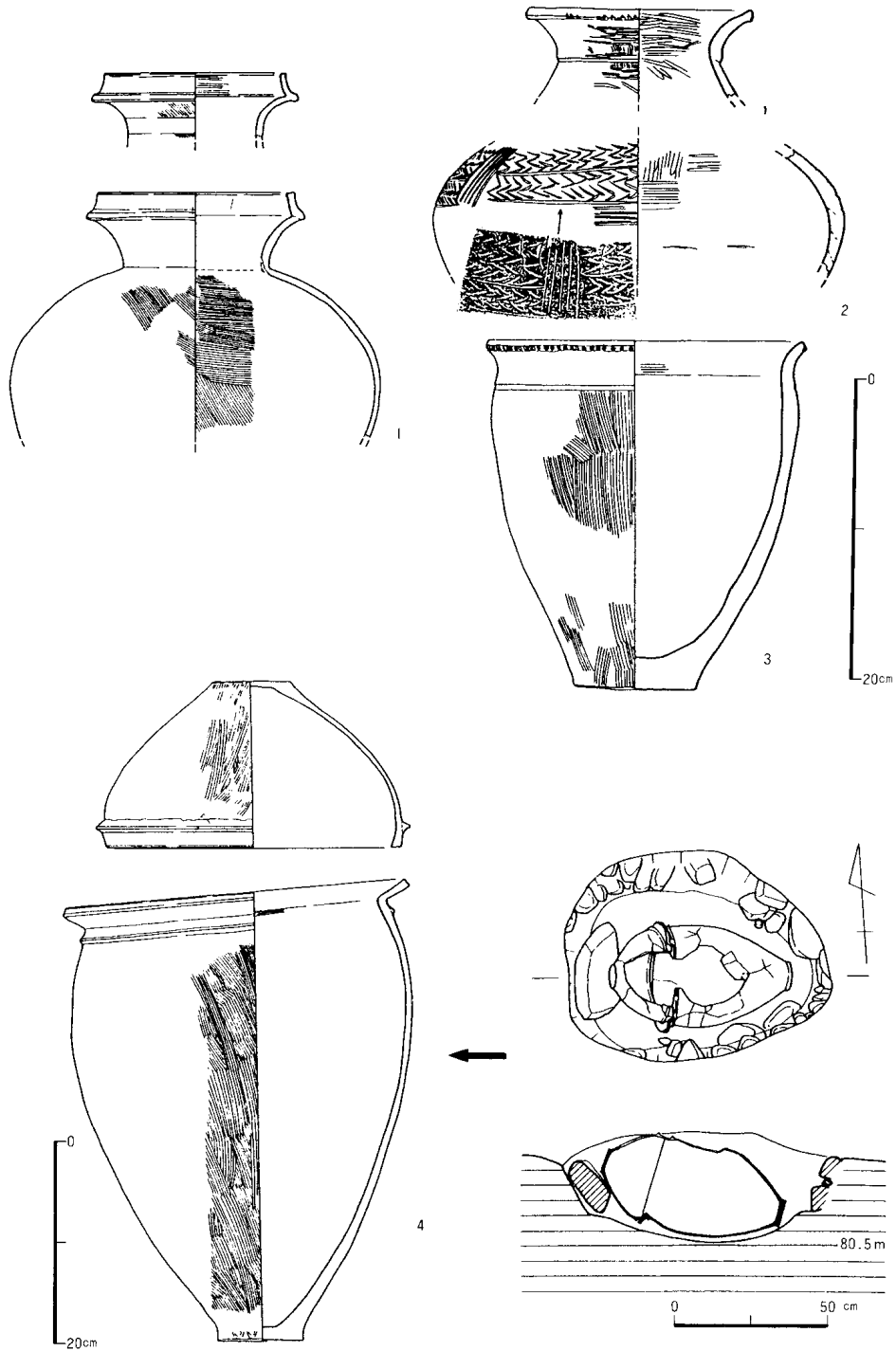
1 打製石鏃 2、3 打製石斧

第32図 タカデ遺跡1号石棺墓出土の小型仿製鏡（弥生後期
後半～末）



(第32・33図は犀川町教育委員会「城井遺跡群」犀川町文化財調査報告書第3集 1992より)

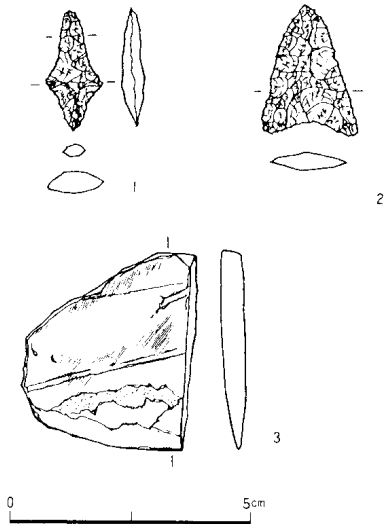
第34図 タカデ遺跡出土土器（一部）



1 B区土壇出土土器(弥生後期後半～末) 2、3 B区2号貯蔵穴出土土器 上・壺 下・甕(弥生前期中ごろ～後半) 4 1号甕棺(弥生中期後半)

(尾川町教育委員会「城井遺跡群」尾川町文化財調査報告書第3集 1992より)

第35図 自在丸遺跡出土石器



- 1、2 石鏃（サヌカイト）
3 石包丁（安山岩系）

上高屋の南端近く、今川の支流である高屋川の上流域、天ヶ谷川の右岸に延びてきた丘陵先端付近に位置する。平成二年十一月から十二月にかけて、圃場整備事業に伴う事前の発掘調査により発見された。調査は

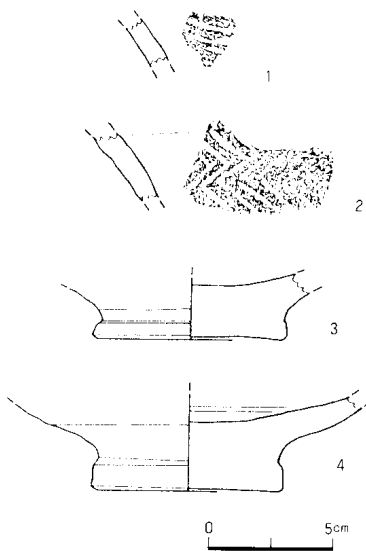
(五) 自在丸遺跡（上高屋）

後期の遺構としては、A区の五十三号住居跡が終末期の土器を出土しており、またA区墓地群中の一号石棺墓からは小型仿製鏡を出土しており、後期後半から終末の時期が考えられている。（写真8、第32・33・34図参照）

中期の遺構としては、A区では三・七号土壇で中期初頭の土器を出土し、一号甕棺墓は中期後半である。

で、B区の三十・三十五号住居跡、一・二号貯蔵穴は前期中ごろから後半と考えられている。特に三十号住居跡出土の甕には靱痕が付いており、石包丁が出土していることは稲作の行われていたことの証拠とされている。

第36図 自在丸遺跡出土土器



- 1、2 壺肩部（前期）
3、4 壺底部（前期）

（犀川町教育委員会「城井遺跡群」犀川町文化財調査報告書第3集 1992より）

程度の身分の人と考えている。（第37図参照）
（小田富士雄『九州古代文化の形成』上巻 弥生・古墳時代編 一九八五より）

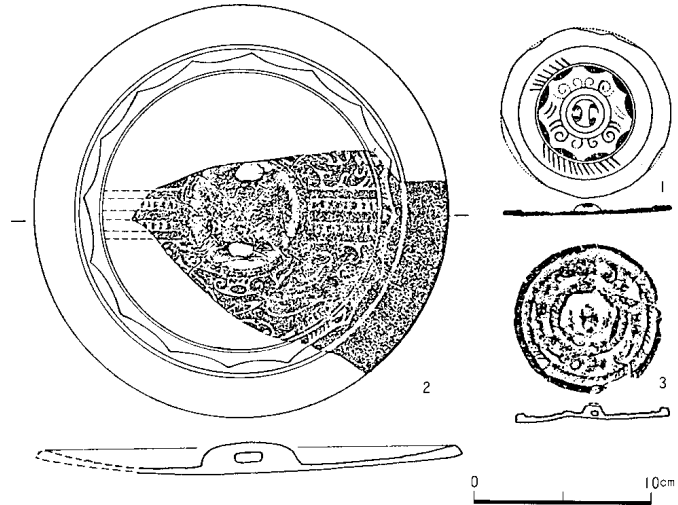
(六) 山鹿遺跡（山鹿）

昭和二十七年（一九五二）とその後にも行われた円墳の土取り中に、墳丘中より横穴式石室の残欠と石蓋土壇墓六基、箱式石棺二基が発見された。そのうち石蓋土壇墓の一基から弥生時代後期後半の小型仿製鏡（径二・六センチ）が出土している。また、二号箱式石棺は封土をもち、封土上からは弥生終末期の高杯形土器（石棺に供献されたもの）が出土しているが、棺内からは成人の頭骨とともに内行花文双獣鏡が出土している。調査者はこの地方の特定個人墓で、単位共同体の特定地位を占める

約二〇〇〇坪の面積がIⅢの調査区にわけて発掘されたが、出土したものは大半が中世の遺構・遺物であった。

弥生土器は、前期の肩部に羽状文をもつ壺片が出土している。弥生時代の石器としては、石鏃・石包丁がある。（第35・36図参照）

第37図 犀川町出土銅鏡

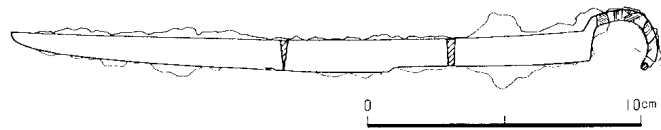


1、2 山鹿遺跡 3 統命院遺跡
 (勝山町教育委員会「亀田南遺跡」勝山町文化財調査報告書第1集 1981より)

(七) 統命院遺跡 (統命院)

遺跡の詳しい状況は不明であるが、統命院の北辺(豊津町と境を接するあたりの丘陵先端部)の土取り現場から箱式石棺(長さ約1.6)が出土。内部から小型仿製鏡一面(径約八・五センチ)が出土した。付近一帯は箱式石棺群が考えられる。(第37図参照)

第38図 松本遺跡出土鉄製素環刀



(八) 松本遺跡 (大熊)

遺跡所在地の特定はできないが、大熊の松本池付近と考えられる。以下児玉真一氏の所見によれば、鉄製素環刀は「石蓋土壙墓から出土し、素環の一部を欠失するがほぼ完形品である。全体に細身の刀子で素環部の平面形は丸味をおびた矩形を呈し、紐状のものを巻きつけていたようである。素環の一端は柄と離れていたと思われる。関はあまり明確ではなく、身と柄のわずかな幅の違う所がそれと知れる程度である」とされている。鉄製素環刀の多くが舶載品であるという前提で、児玉氏はさらにその時期について「北部九州で主体的に素環刀を舶載した時期は弥生時代中期後半頃から、政治・社会的な一つの大きな画期である前方後円墳の成立に象徴される段階までの間に求められよう。使用・副葬時期についてはさらに下るもののあることは論をまたない」と述べている。

(第38図参照)

(森貞次郎博士古希記念『古文化論集』上巻 一九八二より図文を引用)

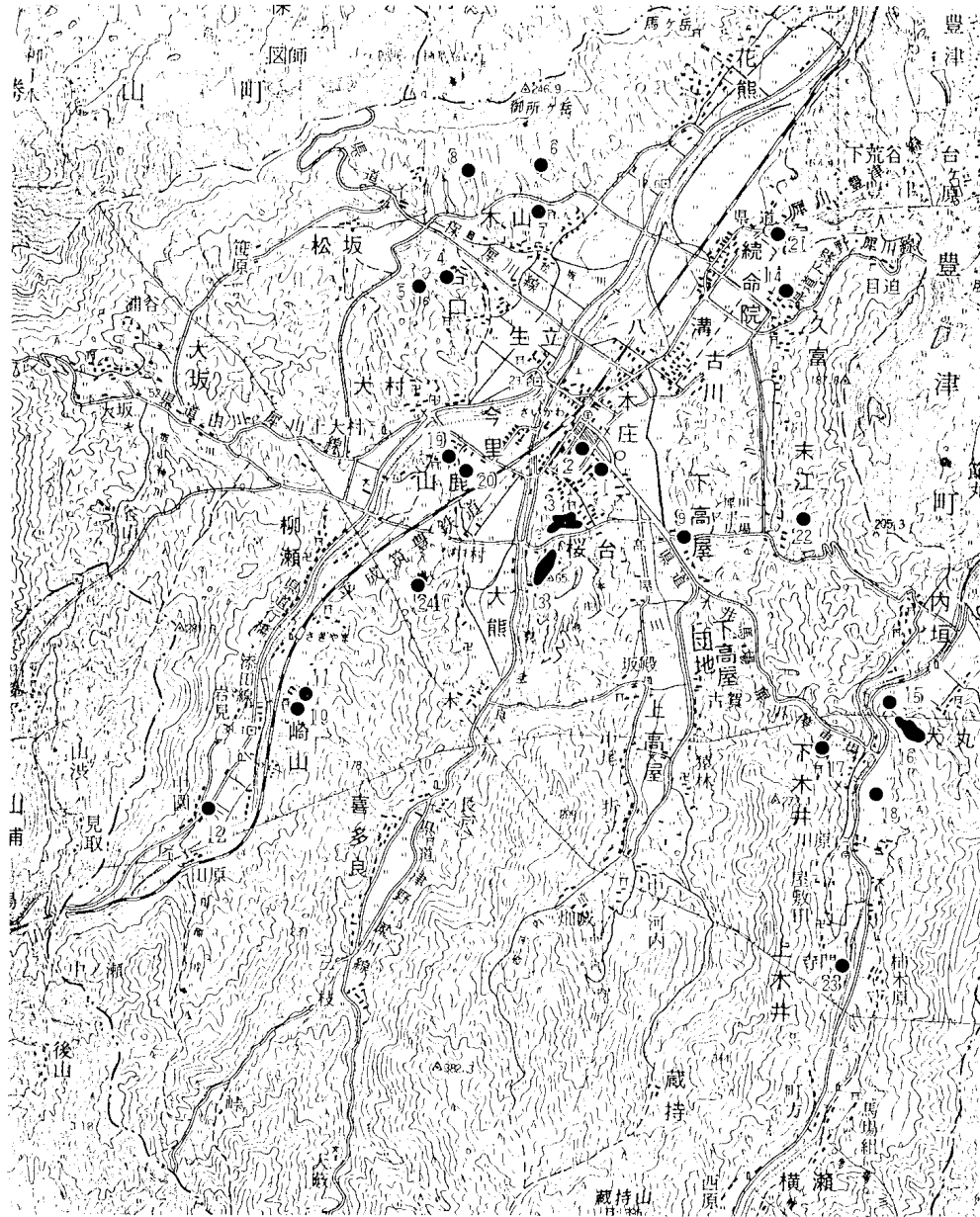


写真9 本庄箱式石棺

第8表 犀川町の弥生時代遺跡

地番 図号	遺跡名	所在地	現状・立地	時代	備考
1	犀川小学校校庭遺跡	犀川町本庄	小学校運動場（丘陵上）	前・中期	住居跡・貯蔵穴
2	本庄遺跡	〃 〃	民家下・道路（低地）	中期	貯蔵穴群
3	本庄池北遺跡	〃 上本庄	畑・道路、荒地（丘陵）	後期	箱式石棺群、うち一つより環頭刀子出土
4	谷口遺跡	〃 谷口	採土により消滅（台地）	中期	中期の壺（完形品）出土
5	蔵田墓地遺跡	〃 〃	墓地（山麓斜面）		甕棺群（土器底部露出）
6	シャクン池遺跡	〃 〃	池岸（山麓低地）		甕棺群（小型の合口甕棺出土）
7	木山遺跡	〃 〃	山林（尾根上）		箱式石棺群
8	福六遺跡	〃 〃	畑地（山麓緩斜面）	中期	散布地（石斧、石鏃、土器片採集）
9	下高屋遺跡	〃 下高屋	山林		箱式石棺群
10	崎山八幡社裏遺跡	〃 崎山	山林（尾根上）		箱式石棺群
11	吉武南遺跡	〃 〃	畑（河岸段丘上）		住居跡？（挟入石斧出土）
12	中其遺跡	〃 〃	道路（河岸段丘上）		箱式石棺（鉄剣出土）
13	松本遺跡	〃 大熊	宅地、畑地	中期	土器片
14	辻垣遺跡	〃 久富	畑（台地上）	前期末	貯蔵穴、住居跡
15	弓馬場A遺跡	〃 木井馬場	畑地（丘陵先端低台地）		住居跡？（土器散布、黒曜石片、貝塚）
16	弓馬場B遺跡	〃 〃	山林（丘陵上）		住居跡？（土器散布、黒曜石片）
17	下木井遺跡	〃 〃	山麓部先端		箱式石棺群
18	タカデ遺跡	〃 〃	水田（河岸段丘上）	前期から後期	住居跡群・箱式石棺群
19	山鹿遺跡	〃 山鹿	山林（丘陵先端部台地）		箱式石棺
20	玉置墓地遺跡	〃 〃	墓地（丘陵上）		甕棺群、箱式石棺群
21	続命院遺跡	〃 続命院	土砂取現場（台地先端）	後期	箱式石棺群（小型仿製鏡出土）
22	末江遺跡	〃 末江	低台地上	前期から中期	住居跡、貯蔵穴、土器、石剣、石戈など
23	寺門遺跡	〃 木井馬場	河岸段丘上	中期	住居跡、土壙、土器、挟入片刃石斧など
24	松本遺跡	〃 大熊	山麓池畔	後期	素環刀

第39図 犀川町の弥生時代遺跡図



- 1 犀川小学校校庭遺跡 2 本庄遺跡 3 本庄池北遺跡 4 谷口遺跡 5 蔵田墓地遺跡 6 シャンク池遺跡 7 木山遺跡 8 福六遺跡 9 下高屋遺跡 10 崎山神社裏遺跡 11 吉武南遺跡 12 中其遺跡 13 松本遺跡 14 辻垣遺跡 15 弓馬場A遺跡 16 弓馬場B遺跡 17 下木井遺跡 18 タカデ遺跡 19 山鹿遺跡 20 玉置墓地遺跡 21 統命院遺跡 22 末江遺跡 23 寺門遺跡 24 松本遺跡

(ウ) 本庄箱式石棺

昭和四十七年（一九七二）、本庄池北側の道路工事中に出土。写真が一枚残されているだけである。鑑定者は不明ながら、約二〇〇〇年前（弥生時代中期）、人骨は女性とされている（写真9参照）。

第四節 古墳時代

一 古墳時代とはどんな時代（概説）

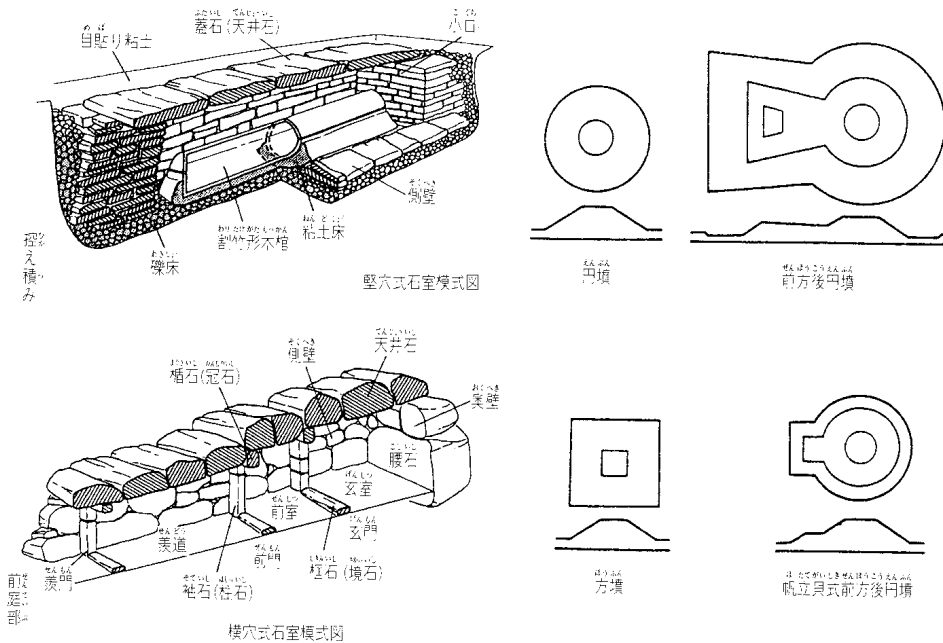
古墳時代

弥生時代に続くこの時代は前方後円墳と呼ばれている。大きく高い盛り土をもった古墳（高塚古墳）があるが、このような前方後円墳をはじめとするさまざまな古墳（円墳・方墳・前方後方墳など）が日本各地で勢力を蓄えてきた首長などによって築造され続ける時代を古墳時代と呼んでいる。古墳時代の始まりは三世紀の後半か四世紀の初頭で、その終わりは七世紀代とされていることから約四〇〇年間続いたことになるが、大化二年（六四六）の改新の詔で古墳の造営を規制した「薄葬令」によって制限を受け始め、さらに仏教の普及や火葬の風習の広まりなどによって衰退していき、八世紀初頭には終息したとされている。

古墳の移り変わり

古墳時代は一般に前期・中期・後期に区分されているが、それぞれの時期における政治的動

第40図 古墳の墳丘と石室の模式図



(「北九州市の文化財ガイド」北九州市教育委員会編 1992より)